

第五章

結論及び今後の課題

第五章では前章での知見や議論に基づいて結論と勧告を提示される。

後者は、提示さ (B) と終了時に閉じているときに結論は (C) 最初に提示さ

A. 結論

本研究では日本語学習者に謝罪するスピーチの実現への転移に焦点を当てた。研究の問題は以下の 3 つの物事音声の認識、音声と音声の実現で発生する転移の実現に礼儀の理論の影響に焦点を当てた。

1. 結論から最初の研究の問題を参照するには、日本語学習者のスピーチの実現である。すなわち十分な seven 戦略、戦略は (件名を変更することにより、エラーの責任を除去) (スピーカー話し手が無視するために必要な条件) オプトアウトのカテゴリを含む 3 つのカテゴリに識別される。そこカテゴリは、謝罪を、戦略を最小限に抑えるために appologize 認識、説明しており、後者のカテゴリには、戦略上の懸念のショー、および提供の修理に改善のサポートである。

発生する音声のカテゴリは、救済支援のカテゴリ（18.4%）が続くカテゴリほとんどの謝罪（78.8%）であり、少なくともカテゴリの出現は、オプトアウトのカテゴリ（2.8%）である。

生まれた物語の戦略は、（説明）を説明する（19.5%）、承認（責任を受け入れる）（15.3%）、提供の修理（続いて最も広く謝罪（明示的に謝罪）（42.9%）である。補償）（11.7%）、ショーの懸念（明らかに）（6.7%）、拒否（責任を拒否）（2.8%）を提供し、出現の戦略は、（エラーを最小限に抑えるため）、少なくとも最小化する戦略である（1.1%）。

2. 音声の実現に向けて礼節の理論的な影響の両方の問題に関連している。

戦略は、明示的に最も広く ~~スピーカー=話し手~~ は、 ~~パートナー=聞き手~~ の前記負の面に注意を払うことを示して謝罪するために使用する礼儀戦略の観点から日本語を学んだインドネシア語の話者によって使用される戦略的な謝罪した。謝罪する語句を使用する 42%のスピーチがある。正式なごめん（ごめん）、すみませんと「申し訳ありません/申し訳ございません」に非公式の距離、パワーと親しみやすさに応じて発語内行為指示表現ショーの丁寧語で。これらの違反の原因を説明したり、言及するための戦略の使用など多くの 19 と負の礼儀正しさの一種である。%シーケンス 3-はずっと 15.3 パーセントとしてのとしての

否定的な礼儀正しさの他の戦略の形で間違いを認めることの否定的な礼儀正しさの戦略を使用することである。

3. 日本語学習者のスピーチで発生した転移を指す。日本語ネイティブで、すなわち許容少ない許容し、容認できない 3 つのカテゴリに分析した。という 2 つの転移タイプ、すなわち語用言語学と社会語用論と。転移が正常に、ネイティブ スピーカー話し手 によって、または不適切に最初の言語から第二言語への転移における発話行為の戦略であれば使用されているから体系的に異なる特定の発話行為に送達フォロー語用論語用言語学 スピーカー話し手 である。インドネシアなどのシーケンスパターンは日本の基地に直接転移され、「すみません...おそくなりました。入ってもいいですか」<残念私は遅刻。入ってもいいですか?>。日本語は表現として日本語での語順のパターンに関係なく「来て連れて」が必要「連れて来て」をインドネシアに構成されている。

社会語用論転移は、異なる言語の根底にある文化の違いが原因で発生する。これは、同じように動作する言語の異なる知覚の出現につながっている。例えば、使用中の使用は、「私のせいで」日本語に感謝したが先生から本を場面上を借りて、先生は明らかにだけしたがって、スピーカー話し手 への「私のせいで」を使用して本を貸してよいかのでしょう公表されていない。その後、「おじゃましてしまいました」不適切フレーズの使用「おじゃましてしまいました」による音声デー

タ (140) 使われるフレーズを使用して我々は部屋一つを入力するとき
に使用される。あなたが"邪魔"の式でより正確であるの意味を表現した
い場合は「迷惑をかけてしまいました」。

多くの理由を示唆している日本の謝罪では、転移に責任と多くの責
任を認めると、最終的にネイティブに少ない許容を見つけることを拒否し
た。

B. 今後の課題

この場合、外国語の学習では言語能力、談話能力、社会言語学的能力
と戦略的な能力から構成される能力の一部であることを理解し、コミュニ
ケーションの社会的ルールを遂行できるように日本語である。言語能力は
言語の伝統的なルールを使用する人の能力を指す許容/正しいである。談
話能力は、全体と一貫した意味（コヒーレンス）となるために、発話の連
続を関連付ける機能を指す。戦略能力が意図する意味がリスナー（*petutur*）
でキャプチャできる通信するために、問題や障害を解決する能力であるの
に対し、社会言語学的能力は、不適切なスピーチや文脈に応じて（適切な）
良いを選択する機能である。

日本がこのようなことは避けるべきで、それによってコミット違反か
ら スピーカー話し手 を保存するために謝罪するスピーチをする理由の多く
を与えることによって、インドネシア語で。理由を与えることによって、

その多くは、実際に私たちに日本の信頼をなくすことが、我々は責任を負うものではない人たちに分類される。

本研究では依然として制限がある、従ってそれはターゲットの言語に不可欠な学習と異文化コミュニケーションの細目を開発するための努力における日本語教育教材の開発の利点と同様の言語間語用論の研究を掘り続けることをお勧めする。この時間の中に日本語の学習は認知的側面にのみ焦点を当てている。とより頻繁に文法的な目標言語について説明する。感情と精神面でも異文化コミュニケーションがうまくできるように、彼女のニーズを充足する必要がある。

ターゲット言語としての日本語学習の整合性はフィールドでの通信需要の形式になる。社会の現実にはできるだけ近いので、学習のいずれかを試してみてください。第二言語習得では、最初の言語の影響は、対象言語を学習困難の問題を克服するために考慮されるべきである。日本語を教えることによって実践的な能力の開発に基づいている。

C. 終わりに

第五章では、日本語学習者に謝罪発話行為の実現にインドネシアの移転に関する調査報告書の最終章である。人間が相手のスピーチでファウルを持って、それが彼の対談者が不快と脅威を感じていないになるために関係なく、音声の実現に影響を与える様々な要因の、謝罪である。この研究

では既存の戦略の実現の使用するのは、類似の研究で見つけることができる。

